

受験生の意識および入試成績からみた受験行動の構造

～センター試験を終えた一般入試受験者に注目して～

西郡 大 (佐賀大学アドミッションセンター)

一般入試の受験者にとってセンター試験の結果は、最終的な出願決定において大きな要因となっている。本研究では、こうした影響力を前提に、彼らのセンター試験に対する意識面、成績面の観点から出願決定および入学後意識について検討した。その結果、センター試験の結果に対する認識と志望強度のパターンおよびセンター試験の成績水準によって、「出願する上で関心を寄せた情報」、「受験を決めた要因」、「どのような気持ちで受験したか」、「個別試験に向けた受験対策」などの要因において特徴的な傾向があることが示された。

1. はじめに

「大学全入時代」や高等教育の大衆化ということが一般的に言われるようになった。各大学は、少しでも優秀な学生を確保しようと魅力ある大学作りを目指すと同時に、その魅力を発信していこうと広報活動にも力を入れている。

一方、入試方法に関して言えば、一般入試、推薦入試、AO入試など多様な入試方法が実施されている。近年では、一般入試以外の入学者が約40%とされるが、国立大学に限ってみれば、一般入試入学者が約85%を占め(文科省,2008)、本学¹⁾でも同程度の割合を占めている。

こうした入学者の多くを一般入試によって選抜する国立大学にとって、彼らの受験行動は、学生獲得戦略を検討する上で押さえておきたいメカニズムである。その代表的なものに、一般入試志願者の最終出願決定時期として、センター試験直後が最も多いという報告がある(寺下ら,2008;吉村ら,2010など)。本学の

学内調査でも約55%がセンター試験直後に出願を決めている。

本研究では、センター試験の結果が一般入試志願者の受験行動に大きな影響力を及ぼしているということを前提に、彼らのセンター試験結果に対する意識面、成績面の観点から出願決定および入学後意識について分析した。

2. 方法

2.1 分析データ

分析に使用したデータは、「合格者アンケート」「新入生アンケート」「入試成績」の3点である。「合格者アンケート」は、平成22年度一般入試(前期日程と後期日程)の合格者に向けた合格通知書類にアンケートを同封し、入学手続書類と一緒に回収した²⁾。なお、本アンケートでは、受験番号を記載させている。「新入生アンケート」は、本学の学部新入生全員を対象としたアンケートを毎年4月のオリエンテーション時に行ってお

り、その一部を利用した³⁾。本アンケートでも学籍番号を記載させている。「入試成績」は、本学入学者のセンター試験の成績を利用した。これら3つのデータについて受験番号と学籍番号を連結し、データを一元化した上で分析した。

本学の学部構成は、文化教育学部、経済学部、医学部、理工学部、農学部の5学部で構成されるが、本研究では、経済学部、理工学部、農学部における一般入試での入学者を分析対象とした。その理由は、他の2学部の入試方法が学科および課程ごとに異なり、募集人員も細分化されているのに対し、同3学部は、学部毎に各日程に応じて入試方法がほぼ統一され、受験者が第二希望学科まで志望できるという類似点を持つためである。

2.2 分析の視点

「出願する上で関心を寄せたもの」「本学受験を決めた要因」「センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか」「個別試験に向けた受験対策」「大学入学後に期待すること」⁴⁾（西郡・倉元,2010）「入学直後の気持ち」といった点について、以下の2点から分析した。項目の詳細は巻末資料に示した。

【分析視点①】：センター試験の結果に対する認識と本学への志望強度

センター試験の結果（自己採点結果）に対する認識（以下、「センター認識」と略記）と志望強度を次の4パターンに分け、それぞれの特徴を分析した。

〔パターンⅠ〕：本学第一志望＋センター認識が悪くない（「思った通り」「思ったより良かった」に回答した者）

〔パターンⅡ〕：本学第一志望＋センター認識が悪い（「思ったより良くなかった」と回答した者）

〔パターンⅢ〕：本学第一志望以外＋センター認識が悪くない（Ⅰと同様）

〔パターンⅣ〕：本学第一志望以外＋センター認識が悪い（Ⅱと同様）

【分析視点②】：センター試験成績

分析視点①はセンター試験結果に対する個人認識であるため、客観的なセンター試験の成績がどの程度のものであるのかを把握できない。それゆえ、学部別にセンター試験の成績上位者からA～Dランクに四分割し、実際の成績の相対的な位置づけを示す指標を作成した。以下、本指標を「成績」と略記する。

これら2つの分析視点について、以下の手順で分析を行った。まず、「出願する上で関心を寄せたもの」「本学受験を決めた要因」「入学直後の気持ち」は、質的データであるため、各パターンとのクロス表を作成し、残差分析によって「調整された残差」を算出した⁵⁾。「調整された残差」には標準正規分布が仮定されており、±1.96以上の値を示せば、5%水準で有意差があるとされるため、クロス表の特徴を示す指標として解釈した（該当数値はクロス表で「*」表示）。

次に、「センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか」「個別試験に向けた受験対策」「大学入学後に期待すること」は、量的データのため一元配置の分散分析を行い Tukey 法による多重比較を行った(1%水準で検定)。

3. 結果

3.1 データの内訳

有効データ数は486件であった。その内訳は、経済学部128件（前期：84，後期：44）、理工学部283件（前期：255，後期：28）、農学部75件（前期：59，後期：16）である。

各パターン的人数内訳は、パターンⅠ:76件、パターンⅡ:148件、パターンⅢ:43件、パターンⅣ:202件であった。

3.2 各指標における関係性

〔志望強度とセンター認識〕

第一志望の回答者は、センター試験の結果を「思った通り」、「思ったより良かった」と捉えるのに対し、第一志望以外の回答者は、「思ったより悪かった」と捉える傾向がある（表1）。

表1. 志望強度とセンター認識の関係

センター認識	志望強度		合計
	第一志望	第一以外	
思ったより良くなかった	<u>148*</u> (-4.1)	<u>202*</u> (4.1)	350
思った通り	<u>43*</u> (3.3)	<u>21*</u> (-3.3)	64
思ったより良かった	33 (1.9)	22 (-1.9)	55
合計	224	245	469

() 内の数値は、「調整された残差」

〔志望強度と成績〕

成績別に志望強度をみたところ、特徴的な違いは確認されなかった（表2）。

表2. 志望強度と成績の関係

センター認識	成績水準				合計
	A	B	C	D	
第一志望	61 (1.1)	49 (-1.1)	53 (-.9)	61 (1.0)	224
第一志望以外	57 (-1.1)	65 (1.1)	68 (.9)	58 (-1.0)	248
合計	118	114	121	119	472

() 内の数値は、「調整された残差」

表4. センター認識・成績と志望強度の関係

志望強度	分類												合計
	1-A	1-B	1-C	1-D	2-A	2-B	2-C	2-D	3-A	3-B	3-C	3-D	
第一志望	24 (-1.8)	31 (-1.9)	<u>39*</u> (-2.1)	54 (1.1)	<u>19*</u> (2.9)	<u>14*</u> (2.3)	6 (.8)	4 (-.7)	18 (1.8)	4 (-1.2)	<u>8*</u> (2.5)	3 (.6)	224
第一志望以外	41 (1.8)	51 (1.9)	<u>63*</u> (2.1)	49 (-1.1)	<u>6*</u> (-2.9)	<u>5*</u> (-2.3)	4 (.8)	7 (.7)	10 (-1.8)	9 (1.2)	<u>1*</u> (-2.5)	2 (-.6)	248
合計	65	82	102	103	25	19	10	11	28	13	9	5	472

() 内の数値は、「調整された残差」

分類数値 1:「思ったより良くなかった」、2:「思った通り」、3:「思ったより良かった」

〔センター認識と成績〕

Aランクは「思った通り」、「思ったより良かった」が多く、「思ったより良くなかった」は少ない。逆に、「思ったより良くなかった」はC、Dランクに多く、センター認識と実際の成績がある程度符合している傾向がみられる（表3）。

表3. センター認識と成績の関係

センター認識	成績水準				合計
	A	B	C	D	
思ったより良くなかった	<u>65*</u> (-5.7)	89 (-.4)	<u>102*</u> (2.7)	<u>106*</u> (3.3)	362
思った通り	<u>25*</u> (2.8)	18 (.5)	10 (-1.9)	12 (-1.4)	65
思ったより良かった	<u>28*</u> (4.7)	14 (.0)	9 (-1.6)	<u>5*</u> (-3.0)	56
合計	118	121	121	123	483

() 内の数値は、「調整された残差」

〔センター認識・成績と志望強度〕

センター認識をA～Dの成績別に分類して、志望強度との関係をみた。「思ったより良くなかった」と認識するCランクの回答者は、第一志望以外の者が多い。一方、「思った通り」と認識するA、Bランクの回答者は、第一志望の者が多い傾向がみられた。「思ったより良かった」では、Cランクにおいて、第一志望である者が多かった（表4）。

3.3 分析視点①の結果

〔出願する上で関心を寄せたもの〕

パターンⅡで、「センター試験と個別試験の配点比率[項目 2]」よりも「個別試験で課される受験科目および内容[項目 1]」や「志願倍率[項目 5]」に関心が集まる傾向がみられた反面、パターンⅣは、[項目 2]に対する関心の高さが示された（表 5）。

表 5. 出願する上で関心を寄せたもの

パターン	項目番号						合計
	1	2	3	4	5	6	
I	30 (-.1)	17 (-.8)	14 (.7)	6 (1.2)	1 (-1.5)	7 (.6)	75
Ⅱ	71* (2.4)	30* (2.0)	20 (-.9)	6 (-.7)	11* (2.1)	9 (-.8)	147
Ⅲ	13 (-1.4)	12 (.2)	9 (.9)	3 (.6)	2 (.0)	4 (.5)	43
Ⅳ	73 (-1.4)	64* (2.4)	31 (-.2)	9 (-.5)	7 (-.9)	15 (.0)	199
合計	187	123	74	24	21	35	464

() 内の数値は、「調整された残差」

〔本学受験を決めた要因〕

パターンⅠに「希望する学部がある[項目 1]」を挙げる者が多く、パターンⅢでは、「経済的負担が他の進路選択よりも軽い[項目 5]」「高校や塾・予備校の先生などに受験を勧められた[項目 8]」と回答する傾向がある。また、他のパターンでは、パターンⅡのみ「本学に通う先輩から受験を勧められた[項目 10]」を挙げている（表 6）。

〔入学直後の気持ち〕

パターンⅣにおいて、入学後の気持ちとして、「不満[項目 5]」を挙げる傾向が確認された（表 7）。

表 6. 本学受験を決めた要因

パターン	項目番号														合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
I	36* (2.4)	2 (.9)	3 (-.8)	11 (.4)	3 (.5)	13 (-1.5)	1 (-1.5)	1 (-1.6)	1 (-.5)	0 (-.6)	0 (-.8)	0 (-.4)	1 (.5)	2 (1.4)	74
Ⅱ	49 (-.5)	2 (-.1)	11 (1.0)	25 (1.8)	2 (-1.4)	29 (-1.3)	8 (.5)	6 (-.5)	2 (-.8)	2* (2.1)	2 (1.3)	1 (1.5)	1 (-.3)	2 (.4)	142
Ⅲ	12 (-1.4)	0 (-.9)	1 (-1.2)	4 (.9)	4* (2.4)	13 (.7)	3 (.6)	6* (2.7)	0 (-1.1)	0 (-.5)	1 (1.4)	0 (-.3)	0 (-.7)	1 (.8)	45
Ⅳ	68 (-.5)	3 (.0)	13 (.4)	21 (-1.4)	5 (-.5)	56 (1.9)	10 (.3)	10 (.1)	7 (1.8)	0 (-1.2)	0 (-1.5)	0 (-.9)	2 (.3)	0 (-1.9)	195
合計	165	7	28	61	14	111	22	23	10	2	3	1	4	5	456

() 内の数値は、「調整された残差」

表 7. 入学直後の気持ち

パターン	項目番号									合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
I	29 (.4)	4 (.1)	8 (.8)	2 (1.4)	0 (-1.3)	7 (-.8)	22 (.9)	3 (-1.3)	0 (-1.3)	75
Ⅱ	55 (.4)	10 (1.1)	9 (-1.1)	2 (.4)	0* (-2.0)	22 (1.4)	32 (-1.0)	11 (.0)	3 (.4)	144
Ⅲ	12 (-1.6)	3 (.4)	6 (1.2)	1 (.8)	0 (-1.0)	8 (1.2)	13 (.5)	3 (-.3)	0 (-.9)	46
Ⅳ	74 (.3)	7 (-1.4)	16 (-.2)	0 (-1.9)	9* (3.5)	19 (-1.4)	49 (-.1)	18 (1.1)	5 (1.1)	197
合計	170	24	39	5	9	56	116	35	8	462

() 内の数値は、「調整された残差」

〔センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか〕

パターンⅡは、他のパターンに比べて「センター試験の得点が合格圏内にあると思って出願した[項目 1]」の平均点が低いけれども、「個別試験（2次試験）で逆転するつもりで出願した[項目 2]」

と考える傾向がある（パターンⅣを除く）。また、同パターンは、「センター試験の結果は気にせずに出願した[項目 3]」に関して、パターンⅣに対してのみ有意差が確認された（表 7）。

表 7. センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか

項目 番号	I (n=75)	II (n=146)	III (n=42)	IV (n=193)	主効果 F 値	多重比較
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)		
項目 1	4.43(.98)	3.36(1.42)	4.43(.91)	3.98(1.32)	15.65**	Ⅱ < I =Ⅲ=Ⅳ
項目 2	2.04(1.16)	3.20(1.46)	2.24(1.38)	2.81(1.61)	11.96**	Ⅱ > I =Ⅲ,Ⅳ > I
項目 3	2.09(1.38)	2.33(1.26)	2.07(1.22)	1.89(1.20)	3.48*	Ⅱ >Ⅳ

* $p < .05$ ** $p < .01$ 多重比較の有意水準は1%

〔個別試験に向けた受験対策〕

「過去問題を利用した対策に、かなりの時間を費やした」においてのみ、主効果がみられ ($F(3,449)=4.7, p<.01$)、パターンⅠ ($M=3.77, SD=1.11$) がパターンⅣ ($M=3.16, SD=1.42$) よりも過去問題を利用した対策に多くの時間を費やしていることが示された。

〔大学入学後に期待すること〕

パターン間に有意な差は確認されなかった。

3.4 分析視点②の結果

〔出願する上で関心を寄せたもの〕

C ランクで、「個別試験で課される受験科目および内容[項目 1]」よりも、「受験産業等が予想した個別試験の偏差値[項目 3]」に関心が集まっている。一方、D ランクでは、項目 3 に対する関心は、それほど高くない。

表 8. 出願する上で関心を寄せたもの

成績 水準	項目番号						合 計
	1	2	3	4	5	6	
A	52 (1.2)	27 (.9)	17 (.2)	7 (.6)	2 (-1.6)	10 (.3)	115
B	51 (.7)	28 (-.8)	17 (-.4)	9 (1.5)	5 (-.1)	8 (-.5)	118
C	34* (-3.2)	37 (1.1)	29* (3.0)	5 (-.5)	6 (.3)	10 (.1)	121
D	56 (1.3)	35 (.5)	11* (-2.3)	3 (-1.5)	8 (1.3)	10 (.1)	123
合計	193	127	74	24	21	38	477

() 内の数値は、「調整された残差」

〔本学受験を決めた要因〕

数値自体に大きな差はないが、A ランクにおいて、「自分の適性に合ってそう[項目 3]」が少なく、「本学に通う先輩から受験を勧められた[項目 10]」を挙げる傾向がみられる。B ランクでは、「一人暮らしができる[項目 13]」を挙げられる傾向があり、D ランクでは「他大学よりも合格可能性が高かった[項目 6]」を理由として挙げる者が少なかった（表 9）。

〔入学直後の気持ち〕

D ランクで、「安心[項目 2]」や「開放[項目 3]」が少なく、「不安（学力面）[項目 6]」を感じる者が多かった（表 10）。

表 9. 本学受験を決めた要因

成績水準	項目番号														合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A	41 (-.2)	2 (.3)	<u>2*</u> (-2.2)	21 (1.8)	3 (-.3)	30 (.6)	4 (-.8)	3 (-1.3)	3 (.4)	<u>2*</u> (2.5)	0 (-1.0)	0 (-.6)	0 (-1.1)	3 (1.9)	114
B	47 (.7)	2 (.2)	7 (.0)	12 (-1.2)	5 (.9)	28 (-.2)	6 (.1)	5 (-.4)	2 (-.4)	0 (-.8)	1 (.3)	0 (-.6)	<u>3*</u> (2.3)	1 (-.3)	119
C	36 (-1.8)	2 (.2)	10 (1.3)	15 (-.3)	3 (-.4)	36 (1.7)	7 (.5)	6 (.1)	3 (.3)	0 (-.8)	0 (-1.0)	1 (1.7)	1 (.0)	0 (-1.3)	120
D	48 (1.2)	1 (-.6)	9 (.9)	15 (-.2)	3 (.3)	<u>20*</u> (-2.0)	6 (.2)	9 (1.6)	2 (-.4)	0 (-.8)	2 (1.7)	0 (-.6)	0 (-1.2)	1 (-.2)	116
合計	172	7	28	63	14	114	23	23	10	2	3	1	4	5	469

() 内の数値は、「調整された残差」

表 10. 入学直後の気持ち

成績水準	項目番号									合計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
A	49 (1.5)	6 (.0)	10 (.1)	3 (1.9)	2 (-.5)	12 (-.6)	26 (-.8)	6 (-1.1)	2 (.0)	116
B	38 (-1.1)	9 (1.3)	15 (1.9)	1 (-.2)	4 (.9)	11 (-1.0)	29 (-.2)	10 (.4)	1 (-.8)	118
C	36 (-1.7)	9 (1.3)	11 (.3)	1 (.3)	3 (.2)	13 (.4)	33 (.7)	11 (.8)	3 (.8)	120
D	51 (1.4)	<u>1*</u> (-2.5)	<u>4*</u> (-2.4)	0 (-1.3)	2 (-.6)	<u>21*</u> (2.1)	32 (.3)	9 (-.1)	2 (.0)	122
合計	174	25	40	5	11	57	120	36	8	476

() 内の数値は、「調整された残差」

[センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか]

「センター試験の得点が合格圏内にあると思って出願した[項目 1]」に関しては、A, Bランクに差はないものの、C, Dとランクが下がるにつれ、平均点が低下している。「個別試験で逆転するつもりで出願した[項目 2]」は、ランク

の低い順に強くなる(ただし、AとBランクには差がない)。「センター試験の結果は気にせずに出願した[項目 3]」に関しては、DとCランクにおいて有意差が確認され、Dランクのほうがセンター試験の結果を気にせずに出願している傾向がみられた(表 11)。

表 11. センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか

項目番号	A(n=113)	B(n=117)	C(n=120)	D(n=120)	主効果	多重比較
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F 値	
項目 1	4.73(.70)	4.44(.88)	3.98(.99)	2.47(1.35)	117.2**	A=B>C>D
項目 2	1.72(1.03)	2.09(1.23)	3.03(1.42)	4.13(1.16)	91.86**	D>C>A=B
項目 3	2.02(1.29)	1.99(1.21)	1.84(1.15)	2.49(1.31)	6.16**	D>C

* $p < .05$ ** $p < .01$ 多重比較の有意水準は 1%

〔個別試験に向けた受験対策および大学入学後に期待すること〕

ランク間に有意差はみられなかった。

4. 考察

4.1 パターン別にみる特徴

パターンⅠは、第一志望かつセンター認識が悪くなく、センター試験の得点が合格圏内にあると思って出願しているため、個別試験に向けて過去問を利用した受験対策を粛々とやって合格してきた集団である。また、本学受験を決めた要因に、「希望する学部がある」を挙げる傾向があり、合格可能性といった流動的な要因よりも確たる意志に基づいた受験行動といえる。大学側からみれば、最もスマートな受験行動を経た入学者だとみることができる。

パターンⅡは、第一志望ではあるが、センター試験で思うように得点できなかったと認識する集団である。彼らの志望強度は強いものであるため、どうにか個別試験を攻略し、合格を手にしたいと動機付けられることが考えられる。したがって、個別試験で逆転するつもりで出願する傾向があり、出願に際して関心を寄せる情報も、「センター試験と個別試験の配点比率」といった自分ではどうしようもできない既成の情報よりも、「個別試験で課される受験科目および内容」といった個別試験攻略のために少しでも対策を講じるのに役立つ情報を志向する傾向がみられる。

パターンⅢは、第一志望ではないが、センター認識は悪くない集団であり、人数としては少ない。第一志望ではないため、受験を決めた要因も他律的な傾向があり、「経済的負担が他の進路選択よりも軽い」や「高校や塾・予備校の先生などに受験を勧められた」が特徴的な回答

として挙げられる。

パターンⅣは、志望強度が弱く、センター認識も悪い集団であり、該当者が最も多い。出願に際して、「センター試験と個別試験の配点比率」に関心を寄せ、受験決定要因に「他大学よりも合格可能性が高かった」を挙げる者も少なくない。極めて戦略的な受験行動によって入学してきた者である。そのため、入学直後の意識でも「不満」を挙げる者が多い。

4.2 成績別にみた特徴

A, Bランクでは、特筆すべき点はみられないが、相対的に成績が下位であるC, Dランクにおいて特徴がみられた。

まず、出願時に関心を寄せる情報として、Cランクにおいて個別試験の受験科目や内容に関するものよりも、偏差値という数値自体に関心が集まる傾向がある。また、受験決定要因でも「合格可能性」を挙げる者が36件と他ランクよりも多い。これは、学力に対する自信の無さが、自分の希望や目標といったものよりも、合格可能性を重視した戦略的な受験行動を選択させていることが示唆される。そのため、こうした受験者層はセンター試験直後に受験産業等が提供するボーダーラインや偏差値情報等に大きく影響を受けていると推察できる。ただし、Dランクでは、受験決定要因として、合格可能性を挙げる者が相対的に少ない。これはCとDランクを比べたとき、Cランクに合格可能性を志向しがちな第一希望以外の者が若干多いことが影響しているものと考えられる。

入学直後の気持ちをみると、Dランクが特徴的であり、「安心」や「開放」といった気持ちよりも学力面での「不安」を抱える傾向がみられ、学業的側面からのサポートの必要性が示唆される⁶⁾。

5. まとめ

本研究では、センター試験の結果が受験行動にもたらす影響力が大きいことを前提に、センター認識と志望強度の組合せパターン、成績といった受験者特性の観点から出願決定および入学時の意識を分析した。その結果、パターンの違いや成績水準によって、出願に際して関心を寄せる情報や受験決定要因、そして受験に向けた気持ちや対策にも特徴的な傾向がみられることが分かった。

センター試験の影響力は、一般入試受験者にとって無視できないほど大きいことは言うまでもない。どんなに入試広報に力を入れて受験想定者から自大学に興味を持ってもらっても受験者本人がセンター試験で十分な得点を取ることができなかつたら、受験を諦めてしまう可能性は十分に有り得る。その意味において、志願者を少しでも多く獲得したいと願う大学にとって入試広報の効果は限定的になっているとも言えるだろう⁷⁾。逆に言えば、センター試験があることによって、各大学における広報力の差が表出しにくくなっているとも解釈できる。

以上のことを考えたとき、センター試験の結果を踏まえた受験者行動のメカニズムを明らかにすることは、入試広報の側面を強化するにしろ、入学者の特性を把握するにしろ有効な参考情報となり得る。本研究で得られた知見やアプローチが活用されるならば幸いである。

注

- 1) 本稿において「本学」と表記する場合は、佐賀大学を示す。
- 2) 本アンケートは、受験決定の要因および本学の個別試験制度に関する認

識を調査するために、アドミッションセンターが実施したものである。入学辞退者のアンケートは回収できないため全体の回収率は53.6%であったが、入学者に限定してみた回収率は67.8%であった。

- 3) 本アンケートは、入試広報の効果検証および新入生の入学時における意識調査を目的としてアドミッションセンターが実施したものである。回収率は95.0%であった。
- 4) 「学問・研究志向」「大学生活エンジョイ志向」「就職準備志向」の3因子から構成される。
- 5) Haberman(1973)によって提案された残差分析を用いた。

$$\text{調整された残差: } d_{ij} = \frac{e_{ij}}{\sqrt{v_{ij}}}$$

$$e_{ij} = \frac{(n_{ij} - E_{ij})}{\sqrt{E_{ij}}} \quad v_{ij} = \frac{1 - n_{i\cdot}}{N} \frac{1 - n_{\cdot j}}{N}$$

E_{ij} : 期待度数

- 6) D ランクには、センター試験が「思ったより良くなかった」と認識する者が多いことから、潜在的な学力は高いにも関わらず、本来の実力を発揮できずに、たまたまセンター試験を失敗したという学生も含まれることが考えられる。そのため、個別試験の成績なども考慮した入学生の基礎的な学力の把握が学業的側面からの具体的なサポートに繋がるものと思われる。
- 7) 確かに、学力的には上位校を狙える実力を持っているにも関わらず、入試広報によって、各大学の教育や研究の内容に関心を持ちその大学を第一志望とする受験生も一部に存在する。その意味では、入試広報の目的を達成しているとも考えることがで

きるが、これは各大学が置かれている立場や状況次第であり、入試広報の第一の目的を志願者数の確保に置く大学にとって、費用対効果という点からみれば、必ずしも十分とは言えない結果だと思われる。

引用文献

- 中央教育審議会 (2008).「学士課程教育の構築に向けて(答申)」.文部科学省.
- Haberman,S.J.(1973),The analysis of residuals in cross-classified tables, *Biometrics*,29,205-220.
- 西郡大・倉元直樹(2010).「大学進学希望者の高校生が選好する評価方法とは? -「入学者受入れ方針」を検討する上での一視点-」『大学入試研究ジャーナル』,20,35-41.
- 寺下榮・村松毅・田中勝(2008).「一般入試志願者の受験行動に関する調査-募集要項請求から入学手続きまで-」『大学入試研究ジャーナル』,18,13-18.
- 吉村宰・木村拓也(2010).「新入生を対象とした入試広報活動に関する調査」『大学入試研究ジャーナル』,20,209-213.

【巻末資料】（アンケートで使用した項目）

以下の①～③は、気持ちの強い順に3つ選ばせた。本研究では、一番目に挙げられた項目を分析に用いた。

①【出願する上で関心を寄せたもの】（選択肢）

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 1. 個別試験で課される受験科目および内容 | 4. 過去に出題された試験問題（過去問） |
| 2. センター試験と個別試験の配点比率 | 5. 志願倍率（ホームページ等で公表される中間集計） |
| 3. 受験産業等が予想した個別試験の偏差値 | 6. どれも気にしなかった |

【回答欄】 [1番目] _____ [2番目] _____ [3番目] _____ [その他] _____

②【本学受験を決めた要因】

- | | |
|------------------------|---------------------------|
| 1. 希望する学部がある | 8. 高校や塾・予備校の先生などに受験を勧められた |
| 2. 佐賀大学でしかできないものがあった | 9. 家族や親類に受験を勧められた |
| 3. 自分の適性に合っていそう | 10. 佐賀大学に通う先輩から受験を勧められた |
| 4. 自宅から通学できる | 11. 佐賀大学のオープンキャンパスに参加した |
| 5. 経済的負担が他の進路選択よりも軽いこと | 12. 佐賀大学のジョイントセミナー（出張講義） |
| 6. 他大学よりも合格可能性が高かった | 13. 独り暮らしができる |
| 7. 佐賀大学の入試方法は受験しやすかった | 14. 佐賀という地域が魅力的 |

【回答欄】 [1番目] _____ [2番目] _____ [3番目] _____ [その他] _____

③【入学後の気持ち】

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|------|
| 1：期待 | 2：安心 | 3：解放 | 4：満足 | 5：不満 |
| 6：不安（学力面） | 7：不安（対人面） | 8：不安（生活面） | 9：不安（経済面） | |

【回答欄】 [1番目] _____ [2番目] _____ [3番目] _____

以下の④～⑤は、「当てはまらない(1点)」、「あまり当てはまらない(2点)」、「どちらとも言えない(3点)」、「少し当てはまる(4点)」、「当てはまる(5点)」の5件法で回答を得ている。

④【センター試験結果を踏まえ、どのような気持ちで出願したか】

1. センター試験の得点が合格圏内にあると思って出願した
2. 個別試験（2次試験）で逆転するつもりで出願した
3. センター試験の結果は気にせずに出願した

⑤【個別試験に向けた受験対策】

1. 過去問題を利用した対策に、かなりの時間を費やした
2. 過去問題を利用した対策以外に、特別な受験対策を行った
3. 受験対策は何もしなかった